

2020年4月24日

“STAY HOME, SAVE LIVES”（「家を出ず、いのちを救おう」）

—「隣人愛」の実践として（「ステイ・ホーム：数十万のいのちを救う」）

副校長 竹山 幸男

春の訪れとともに、1週間前とくらべても、木々や山々の緑も日に日に濃くなってきて、日中の日ざしも暖かな今日このごろです。キャンパス内の芝生の緑も芽吹き始めて、皆さんの学校への登校を心待ちにしているかのようです。今週も、京都では少し寒暖差のある日々が続いていますが、皆さんのお住まいの地域はいかがでしょう。

特別なかたちでスタートした新学期も今週金曜日で2週間が経過しました。2週間目の今週は、各教科の課題に対して生徒の皆さんからの提出も開始しましたが、うまく提出、返信できていますでしょうか。各教科の先生方から、生徒の皆さんがしっかりと課題に取り組んでくれて、提出してくれている様子をお聞きしているところです。生徒の皆さんだけでなく、先生方も初めてのことで対応に戸惑ったりすることもありますので、生徒の皆さんもわからないことや困ったことがあれば、遠慮なく連絡してください。あくまでも少しずつ、あわてることなく一步一步進めていますので、提出にかかわって、教科の内容についてわからないことがあれば、教科の先生にメールを用いて、また、機器の操作等不明な点があれば、学校（校務センター）までご連絡くだされば、折り返し担当者（ICTヘルプデスク担当者）からご連絡いたしますので、よろしく願いいたします。（問い合わせが多い場合は、折り返しのご返答に時間がかかるかもしれませんが、お待ちくだされば幸いです。）

さて、第3週目にあたっては、これまでの動画を用いた課題の提示、提出、メールでの質問に加えて、教科によっては、zoomで皆さんからの質問を受け付ける時間を設けますので、生徒の皆さんも参加してみてください。また、日ごろの担任の先生からの連絡へのレスポンス（応答）に加えて、クラスの生徒の皆さんとの面談もスタートします。クラスの担任の先生から面談の方法や内容の連絡が来る予定ですので、皆さんの様子をお話ください。健康観察については、引き続き保健室の先生あてご提出ください。第3週目の詳細については、別途ホームページ上の教務部より「第3週目のお知らせ」または学習ポータルサイト上の生徒ページ・生徒伝達に「第3週目のお知らせ」をご覧ください。第1・2週目にもご連絡いたしました、「2020年度版ICT活用・情報倫理ハンドブック」（同志社中学校）の1～28ページに、課題提出で用いているロイロノート、zoomの利用方法を含め、iPadでの学習に際してのさまざまな活用ガイドが掲載されていますので、取り組みの際には、引き続き参照するようにしてください。

先週は、2020年度の学校聖句の最初の部分「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」について考えてみました。今週は、今年度の学校聖句の2つめの部分「隣人を自分のように愛しなさい。」と学校からの呼びかけ「FOR OTHERS (他者のために) -互いに愛し合いなさい。わたしがあなたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」について考えてみたいと思います。(新約聖書：マタイによる福音書22章37節～39節、ヨハネによる福音書13章34節)

この「隣人」(りんじん・となりびと)という言葉は、英語の聖書では「YOUR NEIGHBOR」と訳されています。自分の家族、友達など、日ごろから私たちが会っている人をイメージするものと思われます。聖書の中には、「隣人」について語られている場所がいくつかあります。一番有名なものとしては、「良きサマリア人」のたとえ話があります。(ルカによる福音書10章25節～37節参照)このたとえ話の内容については、また次回以降に考えてみようと思うのですが、聖書の語る「隣人」の意味合いは、私たちが日ごろから知らない、関係を持たない、会ったことのないような人も含んでいること、また、「隣人になる」という私たちの側の主体的な思いや行動を伴うことを考えると、もっと広くて奥深い意味合いを持つものであることを教えられます。

まず最初に、「隣人を自分のように愛する」とは毎日の学校生活の中では具体的にはどういうことか考えてみましょう。まず、「隣人を自分のように愛する」とは、「隣人を自分のように大切にすること」につながります。臨時休校中の今は、学校に登校して友達と実際に会って話すこと、対話することができません。学校に集まってともに考え、学び合い、一緒にさまざまな取り組みをしながら、互いに励まし合い高め合うこと、人として成長していく機会を持つことが難しい、特別な状況の中にあります。ただ、全く何もできないというわけではなく、電話で声を聴きながら話すこと、互いの表情を見ながら対話できるような方法などもあり、さまざまな工夫をしながら、私たちのつながりを確認し合うことは可能です。そのときには、普段の学校生活のときにも増して、「相手の話をよく聴く」「相手の身になって考える」ということを心がけてみてみましょう。「聴く」「傾聴する」ということがなければ、言っていることが理解できず、すれ違いになります。その上で、ぜひ自分の思いや意見を、勇気をもって話してみるようにしましょう。いつものリアルな学校生活と違うので、みんなも同じ状況にあるので、よくわからないことも多く出てくるかもしれませんが、それを恥ずかしがらず先生や友達に聞いてみてください。グローバル時代を生きていく皆さんに知っていただきたいのですが、海外では、相手の話されたことへの反応を即座に求められるので、より緊張感があります。何も反応がないと、自分の話していることに何も関心を持ってもらえていないと思われたり、話していることが全部わかったものとして判断されてしまいます。その意味でも、まず「聴く」「傾聴する」という姿勢、自分以外の人への共感力、想像力をぜひ養っててください。

「置かれた場所で咲きなさい」というベストセラーの本の著者で知られ、長年ノートルダム

清心女子大学学長をされてきた渡辺和子先生。附属幼稚園の園長を兼任されていたころ、その入園テストの親の面接で「家庭でしつけられてきたことは何ですか」とよく尋ねられていたそうです。多くの親は、「周りの人を傷つけたり、迷惑をかけたりしないようにしつけている」と答えられました。渡辺先生は、「これも重要なことですが」と言われた上で、「教育のどの時点かで、『進んで助け合うこと』『弱い人の手伝いをする』といった積極的な愛と奉仕の必要性和喜びを、子どもたちに伝えていかないといけない。『愛は近きより』(Charity begins at home.)」と語られています。

中学生ともなれば、「相手の身になって考える」という点では、「自分の言葉や行動で他者を傷つけないこと」。自分の中にあるイライラ、もやもやしたものを無意識に発散して、人の嫌がることをしたり、言ったり、書いたりしてはいけません。特に、みんなが見えない、消したと思っているLINEの世界においても、自分の端末でなく元のところにしっかり残っています。何か問題となった場合には、「子どもの遊びでした」では通用しない時代となりました。現在臨時休校期間中という特別な状況なので、もし、生徒の皆さんの中で、ご自身の健康のことや心にイライラ、もやもやしたものなどがあり、お話を聞いてもらいたいということがあれば、遠慮なく担任の先生または保健室の先生、校務センターに連絡してみてください。

昨年度から同志社中学校のターム留学先の1つとなり2名の同志社中学生の学んだ、アメリカオレゴン州のセーレムにあるSALEM ACADEMYには、こんな標語が校内のいろいろな場所に掲げられていました。「At Salem Academy we・・・
Respect/Pray/Serve/Love/Encourage/Forgive/Accept/Honor/Celebrate/Welcome/Comfort One Another」この標語のように、普段の毎日の学校生活では、ともに考え、話し合い、学び合っていく過程で、皆さん一人が励まし合い、高め合っていくことが大切です。結果として、「自分だけがよければいい」という考え方を超えて、隣人(仲間・友達)ひいては社会のために、神様から愛され与えられている能力・賜物(タラント・ギフト)を発揮していくことが、一人ひとりの皆さんの喜び、学び続ける姿勢の源になると期待しています。まさに、「FOR OTHERS(他者のために)ー互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。ー」イエス様の言葉に表されている通りです。

3月、コロナウイルス感染症の広がりが問題になったとき、あるお医者さんから若い世代の皆さんにこんなメッセージが寄せられました。

「あなたのいのちを奪わないために。誰かのいのちを奪わないために。

行動を我慢してもらえないでしょうか。」

今から1か月くらい前は、日本全体としてはまだまだ警戒感が弱かったことを思い出しま

す。「ウイルスは人を介してしか運ばれず、感染しないので、何気なく自由に動くことにより、家族はじめ周りの方々、特に皆さんのおじいさん、おばあさん、そして、基礎疾患を持った弱い立場の方々に感染させないようにしましょう」という趣旨のものでした。

今、民主主義国家としてのドイツが、「外出自粛」を機能させ、医療崩壊を引き起こさず、感染拡大をコントロールしていることが世界的な注目を集めています。外出自粛、休業に伴う経済的な補償、検査体制の拡充などさまざまな要因があると言われていますが、3月18日に行なわれたメルケル首相の緊急演説が、ドイツの人々の心に届いたことが大きな契機となったと言われています。（全文訳は後ろに掲載していますのでお読みください）

（東ドイツ出身のメルケル首相にとって）経済活動の自由は、苦勞して勝ち取った権利であることを実感しています。ドイツで行ったことがない閉鎖措置は、民主主義社会において軽々しく、一時的であっても決められるべきものではありません。しかし、それは今、いのちを救うために不可欠なのです。

世界中で懸命に研究が進められていますが、治療法もワクチンもまだありません。唯一できることは、ウイルスの拡散スピードの緩和などの時間稼ぎです。（感染者数や死者数という統計上の数値が世界中のニュースで毎日出されていますが）・・・これは抽象的な数字の話ではありません。あなたの、お父さんであり、おじいさんであり、お母さんであり、おばあさんであり、パートナーであり、つまり生きた人たちの話です。そして、私たちは、どのいのちも、どの人も大切にする共同体です。

今は人との距離を取ることが思いやりの表現です。・・・多くの人にとってこれはきついことでしょう。誰一人孤立させないこと、声かけと希望が必要な方たちの世話をすることも重要になってきます。私たちは、家族として社会として今までとは別の助け合い（相互扶助）のかたちを見つけるでしょう。

私たちは民主主義社会です。私たちは強制ではなく、知識の共有と協力によって生きています。これは歴史的な課題であり、力を合わせることでしか乗り越えられません。

たとえ今まで一度もこのようなことを経験したことがなくても、私たちは、思いやりを持って理性的に行動し、それによっていのちを救

うことを示さなければなりません。それは、一人ひとり例外なく、つまり私たち全員にかかっているのです。皆様、ご自愛ください。そして、愛する人たちを守ってください。ありがとうございました。

2つのメッセージを読みながら、キリスト教主義学校に学ぶ私たち一人ひとりもまた、聖書で語られている「隣人愛」の実践として、イエス・キリストの愛に満たされ、“STAY HOME、SAVE LIVES”のメッセージを私たちの心で受け止めて行動する1週間とさせていただきよう、神様の前に祈らせていただきます。

『隣人を自分のように愛しなさい。』

(マタイによる福音書22章39節)



親愛なるドイツにお住いの皆様

(2020年3月18日 演説全文) ドイツ連邦共和国首相 アンデラ・メルケル

コロナウイルスは現在わが国の生活を劇的に変化させています。私たちが考える日常や公的生活、社会的な付き合い — こうしたもののすべてがかつてないほど試されています。何百万人という方々が出勤できず、子どもたちは学校あるいはまた保育所に行けず、劇場や映画館やお店は閉まっています。

そして何よりも困難なことはおそらく、いつもなら当たり前の触れ合いがなくなっているということでしょう。もちろんこのような状況で私たちはみな、これからどうなるのか疑問や心配事でいっぱいです。

私は今日このような通常とは違った（TV 演説という）方法で皆様に話しかけています。それは、この状況で連邦首相としての私を、そして連邦政府の同僚たちを何が導いているのかを皆様にお伝えしたいからです。

開かれた民主主義に必要なことは、私たちが政治的決断を透明にし、説明すること、私たちの行動の根拠をできる限り示して、それを伝達することで、理解を得られるようにすることです。

もし、ドイツにお住まいの皆さんがこの課題を自分の課題として理解すれば、私たちはこれを乗り越えられると固く信じています。このため次のことを言わせてください。

事態は深刻です。

あなたも真剣に考えてください。

東西ドイツ統一以来、いいえ、第二次世界大戦以来、これほど市民による一致団結した行動が重要になるような事態がわが国に降りかかってきたことはありませんでした。

私はここで、現在のエピデミック（伝染病）の状況、連邦政府および各省庁がわが国のすべての人を守り、経済的、社会的、文化的な損害を押さえるための様々な措置を説明したいと思います。しかし、私は、あなたがた一人一人が必要とされている理由と、一人一人がどのような貢献をできるかについてもお伝えしたいと思います。

エピデミックについてですが、私がここで言うことはすべて、連邦政府とロバート・コッホ研究所の専門家やその他の学者およびウイルス学者との継続審議から得られた所見です。世界中で懸命に研究が進められてはいますが、コロナウイルスに対する治療法もワクチンもまだありません。

この状況が続く限り、唯一できることは、ウイルスの拡散スピードを緩和し、数か月にわたって引き延ばすことで時間を稼ぐことです。

これが私たちのすべての行動の指針です。それは、研究者がクスリとワクチンを開発するための時間です。また、発症した人ができる限りベストな条件で治療を受けられるようにするための時間でもあります。

ドイツは素晴らしい医療システムを持っています。もしかしたら世界最高のシステムのひとつかもしれません。そのことが私たちに希望を与えています。

しかし、わが国の病院も、コロナ感染の症状がひどい患者が短期間に多数入院してきたとしたら、完全に許容量を超えて（医療崩壊して）しまうことでしょう。

これは統計の抽象的な数字だけの話ではありません。お父さんであり、おじいさんであり、お母さんであり、おばあさんであり、パートナーであり、要するに生きた人たちの話です。そして私たちは、どの命も、どの人も重要とする共同体です。

私は、この機会にまず、医師として、または介護サービスやその他の機能でわが国の病院を始めとする医療施設で働いているすべての方々に言葉を贈りたいと思います。

あなた方は、私たちのためにこの戦いの最前線に立っています。あなた方は最初に病人を、そして、感染の経過が場合によってどれだけ重篤なものかを目の当たりにしています。

そして毎日改めて仕事に向かい、人のために尽くしています。あなた方の仕事は偉大です。そのことに私は心から感謝します。

今、重要なのは、ドイツ国内のウイルスの拡散スピードを緩やかにすることです。そして、その際、これが重要ですが、1つのことに賭けなければなりません。それは、公的生活を可能な限り制限することです。もちろん理性と判断力を持ってです。国は引き続き機能し、もちろん供給も引き続き確保されることになるからです。私たちはできる限り多くの経済活動を維持するつもりです。

しかし、人を危険にさらす可能性のあるものすべて、個人を、また共同体を脅かす可能性のあるものすべてを、今、減らす必要があります。人から人への感染リスクを可能な限り抑える必要があるのです。

今でもすでに制限が劇的であることは承知しています。イベント、見本市、コンサートは中止、とりあえず学校も大学も保育所も閉鎖され、遊び場でのお遊びも禁止です。

連邦政府と各州が合意した閉鎖措置が、私たちの生活に、そして民主主義的な自己認識にどれだけ厳しく介入するか、私は承知しています。

わが連邦共和国ではこうした制限はいまだかつてありませんでした。

私は保証します。旅行および移動の自由が苦勞して勝ち取った権利であることを実感している私のようなものにとっては、このような制限は絶対的に必要な場合のみ正当化されるものです。そうしたことは民主主義社会において決して軽々しく、一時的であっても決められるべきではありません。しかし、それは今、命を救うために不可欠なのです。

このため、国境検査の厳格化と重要な隣国数か国への入国制限令が今週初めから発効しています。

経済全体にとって、大企業も中小企業も、商店やレストラン、フリーランサーにとっても同様に、今は非常に困難な状況です。

今後何週間かは、いっそう困難になるでしょう。

私は皆様に約束します。連邦政府は、経済的影響を緩和し、特に雇用を守るために可能なことをすべて行います。

わが国の経営者も被雇用者もこの難しい試練を乗り越えられるよう、連邦政府は、必要なものをすべて投入する能力があり、またそれを実行に移す予定です。

また、皆様は、食料品供給が常時確保されること、たとえ1日棚が空になったとしても補充されるということを感じて安心してください。

スーパーに行くすべての方にお伝えしたいのですが、備蓄は意味があります。ちなみにそれはいつでも意味のあるものでした。けれども限度をわきまえてください。何かがもう二度と入手できないかのような買い占めは無意味ですし、つまるところ完全に連帯意識に欠けた行動です。

ここで、普段滅多に感謝されることのない方たちにもお礼を言わせてください。

このような状況下で日々スーパーのレジに座っている方、商品棚を補充している方は、現在ある中でも最も困難な仕事のひとつを担っています。同じ国に住む皆様のために尽力し、言葉通りの意味でお店の営業を維持して下さりありがとうございます。

さて、今日、私にとって最も緊急性の高いものについて申し上げます。

私たちがウイルスの速すぎる拡散を阻止する効果的な手段を投入しなければ、あらゆる国の施策が無駄になってしまうでしょう。

その手段とは、私たち自身です。私たちの誰もが同じようにウイルスにかかる可能性があるように、今、誰もが皆協力する必要があります。

まず第一の協力は、今日何が重要なのかについて真剣に考えることです。パニックに陥らず、しかし、自分にはあまり関係がないなど一瞬たりとも考えないことです。

不要な人など誰もいません。私たち全員の力が必要なのです。

私たちがどれだけ脆弱であるか、どれだけ他の人の思いやりのある行動に依存しているか、それをエピデミックは私たちに教えます。また、それはつまり、どれだけ私たちが力

を合わせて行動することで自分たち自身を守り、お互いに力づけることができるかということでもあります。

一人一人の行動が大切なのです。私たちは、ウイルスの拡散をただ受け入れるしかない運命であるわけではありません。私たちには対抗策があります。つまり、思いやりからお互いに距離を取ることです。

ウイルス学者の助言は明確です。握手はもうしない、頻繁によく手を洗う、最低でも1.5メートル人との距離を取る、特にお年寄りには感染の危険性が高いのでほとんど接触しないのがベスト、ということです。

こうした要求がどれだけ難しいことであるか、私は承知しています。緊急事態の時こそお互いに近くにいたいと思うものです。私たちは、好意というものを身体的な近さやスキンシップとして理解しています。けれども、残念ながら現在は、その逆が正しいのです。これはみんなが本当に理解しなければなりません。今は、距離だけが思いやりの表現なのです。

よかれと思ってする訪問や、 unnecessaryな旅行、こうしたことすべてが感染拡大を意味することがあるため、現在は本当に控えるべきです。専門家がこう言うのには理由があります。おじいちゃんおばあちゃんと孫は今一緒にいてはいけない、と。

unnecessaryな接触を避けることで、病院で日々増え続ける感染者の世話をしているすべての方々を助けることになります。

こうして命を救うのです。

多くの人にとってこれはきついことでしょう。誰一人孤立させないこと、声かけと希望が必要な方たちの世話をすることも重要になってきます。私たちは家族として、また社会として別の相互扶助の形を見つけるでしょう。

今でもすでに、ウイルスとその社会的影響に対抗する創造的な形態が出てきています。今でもすでに、おじいちゃんおばあちゃんがさみしくないようにポッドキャストをするお孫さんたちがいます。

私たちは皆、好意と友情を示す別の方法を見つけなければなりません。スカイプや電話、メール、あるいはまた手紙を書くなど。郵便はまだ配達されているのですから。

自分で買い物に行けないお年寄りのための近所の助け合いの素晴らしい例も今話題になっています。まだまだ多くの可能性があるとは私は確信しています。私たちがお互いに一人にさせないことを社会として示すことになるでしょう。

皆様をお願いします。今後有効となる規則を遵守してください。私たちは政府として、何が修正できるか、また、何がまだ必要なのかを常に新たに審議します。

状況は刻々と変わりますし、私たちはその中で学習能力を維持し、いつでも考え直し、他の手段で対応できるようにします。そうなればそれをご説明します。このため、皆様にお願ひします。噂を信じないでください。公的機関による発表のみを信じてください。発表内容は多くの言語にも翻訳されます。

私たちは民主主義社会です。私たちは強制ではなく、知識の共有と協力によって生きています。これは歴史的な課題であり、力を合わせることでしか乗り越えられません。私たちがこの危機を乗り越えられるということには、私はまったく疑いを持っていません。けれども、犠牲者が何人出るのか。どれだけ多くの愛する人たちを亡くすことになるのか。それは大部分私たち自身にかかっています。私たちは今、一致団結して対処できます。現在の制限を受け止め、お互いに協力し合うことができます。

この状況は深刻であり、まだ見通しが立っていません。それはつまり、一人一人がどれだけきちんと規則を守って実行に移すかということにも事態が左右されるということです。たとえ今まで一度もこのようなことを経験したことがなくても、私たちは、思いやりを持って理性的に行動し、それによって命を救うことを示さなければなりません。それは、一人一人例外なく、つまり私たち全員にかかっているのです。皆様、ご自愛ください、そして愛する人たちを守ってください。ありがとうございました。

【試訳：林フーゼル美佳子さん <https://www.mikako-deutschservice.com/> より引用】



<https://youtu.be/caUFMAipVYI> on YouTube